オピニオン＆フォーラム

電撃会談 政治ショーか

耕論

現職の米国大統領が軍事境界線を越え、初めて北朝鮮の地を踏んだ。電撃的な米朝首脳会談は世界を驚かせたが、核問題の解決は見通せない。壮大な政治ショーに過ぎなかったのか。

コラージュ・菊池 桃

基準なき交渉 不信感増幅

佐橋（さはし） 亮（りょう）さん　東京大学准教授

1978年生まれ。専門は国際政治学。今年から現職。著書に「共存の模索　アメリカと『二つの中国』の冷戦史」。

今回の会談により、米朝関係は昨年6月にシンガポールで行われた最初の首脳会談直後の段階まで戻ったといえるでしょう。両国関係は停滞していましたが、少なくともこれで、北朝鮮の非核化に向けた交渉は再開します。

しかし、米国では政治家や専門家に加え有権者も、トランプ米大統領のパフォーマンス外交と実際の成果との差に気がつきはじめています。トランプ氏の思惑通り、北朝鮮外交での実績のアピールが来年の米大統領選でどこまで追い風となるかは未知数です。

対北朝鮮に限らず、中国、イラン、中東などあらゆる外交を貫くことですが、トランプ氏は米国大統領として異質の存在です。米大統領は平時における外交の権限を一手に握り、軍の最高司令官でもあり、絶大な力があります。しかし、少なくとも近年は周辺の専門家、すなわち「プロ」による助言体制が抑制弁の役割を果たし、大統領の思い通りではなく、チームとして外交を行ってきました。

ところがトランプ氏は違います。副大統領や国務長官らの意見と考えが違っても気にせず、事務方の積み上げを無視して物事を決めるのです。今回の米朝首脳会談はその端的な例でしょう。米中も同様です。

米政権はアジアと中東での二正面作戦を避けてイラン問題に注力するため、北朝鮮との関係を改善しようとしたとの見方があります。今後、イランでの軍事行動も辞さないのではないかという懸念もありますが、そうでしょうか。側近はともかく、トランプ氏自身にそうした地球規模の戦略があるようには思えません。彼は戦争が嫌いです。

専門家集団の支えを受けないためか、トランプ氏の行動は矛盾に満ちています。イランが比較的真面目に守っていた核合意を一方的に破棄し、核開発をやめない北朝鮮には非常に甘い。二重基準というより、基準がありません。

重要なのは北朝鮮の非核化の定義と進め方です。一気にミサイルと核弾頭の開発を放棄させるのではなく、核開発の凍結を入り口に、小さな取引と合意を積み重ねる段階的非核化論に米国が傾いていることは間違いないでしょう。

何としても避けるべきシナリオは、米朝間で交渉が進まず、北朝鮮が核弾頭とミサイルの戦力を増強し、米国が武力を用いる行動に出ることです。交渉それ自体は最悪のシナリオではなく、実のある成果につながるよう、非核化、平和体制へのロードマップを各国は構想すべきでしょう。

ただ、北朝鮮の立場からみれば、核開発の国際合意をしても、イランのように一方的に破棄されることも想定しなければなりません。互いに不信を取り除き、信頼しあえるかがカギです。

（聞き手・池田伸壹）

朝鮮戦争終結の機会到来

李（イ） 泳采（ヨンチェ）さん　恵泉女学園大学教授

1971年、韓国生まれ。専門は日韓、日朝関係。著書に「いま、朝鮮半島は何を問いかけるのか」など。

米朝首脳が、初めて板門店で会談した日、ソウルにいました。駅の大型テレビを多くの人々が見つめていました。トランプ米大統領が南北の軍事境界線を越える姿や、金正恩（キムジョンウン）朝鮮労働党委員長、文在寅（ムンジェイン）韓国大統領を交えて3人が歩く姿に涙を流す人もいました。世界では政治ショーと冷ややかにとらえる向きもありますが、国土が戦場となった朝鮮半島の人々にとっては平和への大きな一歩です。

文大統領は「米朝は行動により事実上、敵対関係を終息させ、新しい平和の時代の本格的な始まりを宣言した」と述べました。ロマンチックですが、私も朝鮮戦争終結のチャンスが来たと受け止めています。南北だけで戦争を終えることはできません。国連軍の名のもとに参戦した米国も加わる必要があります。

1953年、朝鮮戦争の休戦協定が結ばれた場所が板門店であり、南北の対立と分断の象徴でもあります。南北の当局者がここで握手を交わしたこともありましたが、激しい言葉の応酬もありました。

2000年、北朝鮮との和解を進める「太陽政策」を掲げた金大中（キムデジュン）大統領が平壌を訪れ、金正日（キムジョンイル）総書記と初めて会談しました。その年、韓国で公開された映画「JSA（共同警備区域）」は、板門店を舞台に南北の兵士の友情と葛藤を描きました。

韓国人の多くは、この映画を通して北の兵士も人間だと認識するようになりました。独裁時代に反共映画がつくられ、学校でも反共教育が盛んでした。頭に角がはえた北朝鮮の人たち、ブタのように描かれた指導者。そんなイメージを押しつけられたのです。

07年には盧武鉉（ムヒョン）大統領も金総書記と会談しました。しかし保守政権が登場したり南北間で衝突が起きたりすると、和解のプロセスが崩壊し、対立が繰り返されてきました。

文大統領は、その根本原因は朝鮮戦争が終わっていないことにあると考えます。戦争終結を宣言し、平和協定を結び、南北の和解と信頼を確かにする。統一はまだ先のことでも、経済交流が進み経済規模が大きくなれば、韓国の若者らの失業問題もいい方向に向かう。そうした発想です。

南北の分断は日本の植民地支配とも関係しています。朝鮮戦争は米ソ冷戦下、資本主義と共産主義の対立でもありますが、内戦の側面もありました。45年に日本の支配が終わり、どういう国をつくっていくか。日本に協力した「親日派」と、日本に抵抗した人たちの間の生存のための激しい闘いでもありました。

朝鮮半島が安定すれば、日本の防衛費や、沖縄などの米軍基地の負担も軽くなります。そうした意味で朝鮮半島の問題は日本近現代史の延長線上にあり、日本でも関心を持って見守って欲しいと思います。

（聞き手・桜井泉）

独裁者と連帯 奇妙な平和

町山（まちやま） 智浩（ともひろ）さん　映画評論家

1962年生まれ。編集者などを経て97年から米国在住。著書に「今のアメリカがわかる映画100本」など。

板門店で実現した電撃的な会談や、それに至るトランプ米大統領から北朝鮮の金正恩（キムジョンウン）朝鮮労働党委員長へのツイッターでの呼びかけなどについて、一般のアメリカ人は混乱しています。今回に限らず、ポンペオ国務長官など政権の外交チームと、トランプ氏本人の言動が一致しない、というか対立しているからです。

来年の大統領選挙で再選を目指すトランプ氏は、「現職の米大統領として軍事境界線を初めて越えた」という実績を劇的に演出しようとしたのでしょう。

これに対し、米民主党上院院内総務のチャック・シューマー氏は「米国の外交で最悪の数日間」「リアリティーショー外交」と批判していました。再選に効果的な写真を撮るためだけの、米国の外交を不安定化する、典型的な「トランプショー」というわけです。こうした冷ややかな見方は、シューマー氏に限りません。

CNNはトランプ氏と金正恩氏の関係を「プロマンス」と表現しました。「ブラザー（兄弟）」と「ロマンス」の造語です。トランプ氏が「私も彼が好きで、彼も私が好き」「二人は恋に落ちた」などと公言しているからです。

金正恩氏に限らず、トランプ氏は独裁的な権力者に対するあこがれが強いようです。米国の伝統であるはずの民主主義や人権の尊重、法の支配といった原則に反する行動をとる国に対し、政府は批判しても、トランプ氏の言動はそれと露骨に対立しているから国民は混乱するのです。

ウクライナ問題で国際的に非難され、米国内の選挙に介入したとの疑惑もあるロシアに対し、米政府は制裁や国外追放などを実施しましたが、トランプ氏はプーチン大統領との仲の良さをアピールし続けています。中国と貿易で争いながらも、習近平（シーチンピン）国家主席が憲法を改正して任期を撤廃したと聞いて「終身大統領、我々も試してみるか」とうらやましさを隠しません。

米ワシントン・ポスト紙にも執筆していたジャーナリスト殺害に関与したとされるサウジアラビアのムハンマド皇太子や、麻薬戦争でギャングを殺しまくったと言われるフィリピンのドゥテルテ大統領も擁護しています。

トランプ氏は「バイデン前副大統領をIQが低いと言った金正恩に同意するよ」とも発言しています。「自国民より核やミサイルでアメリカを狙う独裁者の味方なのか」と米国民を驚かせましたが、二人が軍事境界線を歩いて行き来する映像は、さらにその印象を強くしました。ただトップ同士が友好的である限り、戦争や武力衝突にはならないのも事実。トランプ氏と独裁者の連帯で平和が保たれているという、なんともおかしな事態ですね。

（聞き手・池田伸壹）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。